The Japan Lung Cancer Society



## P-1　禁煙後の肺がん罹患リスクの推移 ―多施設共同症例対照研究の結果―

大阪府立成人病センター調査部[1]、内科[2]、外科[3]、国療近畿中央病院外科[4]、内科[5]、大阪府立羽曳野病院内科[6]、外科[7]、国療刀根山病院外科[8]、大阪赤十字病院呼吸器科[9]、北野病院胸部外科[10]、関西電力病院呼吸器科[11]、大阪大学第一外科[12]、大阪から肺がんをなくす会[13]
○祖父江友孝[1]、鈴木隆一郎[1]、藤本伊三郎[1]、松田 実[2]、土井 修[3]、森 隆[4]、古瀬清行[5]、福岡正博[6]、安光 勉[7]、桑原 修[8]、市谷迪雄[9]、瀧 俊彦[10]、桑原正喜[11]、中原数也[12]、遠藤勝三[13]、服部正次[13]

対象および方法：大阪から肺がんをなくす会は、大阪府下主要肺がん専門病院8施設の参加をえて、肺がんの発生要因に関するhospital-based case-control studyを実施した。症例は、1986-1988年に、上記施設に原発性肺がんの診断で新入院した男性患者1,052例とし、対照は、同期間上記施設に原発性肺がん以外の診断（喫煙関連疾患を除く）で新入院した男性患者1,378例とした。喫煙歴は入院時自記式問診票により把握し、年齢訂正オッズ比を、Mantel-Haenszel法により計算した。
結果：現在喫煙者の肺がん罹患リスクを1.0とすると、入院時から1-4年前、5-9年前、10-14年前、15-19年前、20-24年前、25年以上前に禁煙した者のリスクは、それぞれ、0.87、0.52、0.55、0.59、0.50、0.27となった。非喫煙者と比較した場合の現在喫煙者のリスクは4.18（95%信頼区間2.81-6.09）であった。組織型別にみると、リスクの減少傾向は、小細胞癌では早く、腺癌では遅く、扁平上皮癌は両者の中間であった。

## P-2　扁平上皮癌と腺癌症例の癌以外の危険因子

埼玉県立がんセンター胸部外科
○山本光伸，師田哲郎，西村仁志

目的：当センター開所後約15年間の肺癌の手術症例375例中、扁平上皮癌症例（扁）は147、腺癌症例（腺）は168であった。手術症例中他病死例20、術死例7があったが、扁の他病死は14、術死は4で、腺の他病死4、術死2と比較すると、有意に扁で、術死を含む他病死例が多かった。扁には、癌以外に生命に関する危険因子があるものと思われ、その点について検討した。
結果：平均年齢は扁が63.2、SD8.9、腺が58.2、SD10.3で、扁の平均年齢は腺より有意に高かった。喫煙については、扁147のうち男性は134例で全員喫煙者、女性13例の内6例が喫煙者であった。腺168のうち男性は85例、うち3例を除く全員が喫煙者、女性は83例、うち8例のみが喫煙者であった。男性の喫煙係数(BI)の平均値は、扁が1080.2、腺が1014.6で両者に差はなかったが、女性喫煙者のみについてみると、扁が876、腺が279で、扁が有意に高かった。飲酒についての検討は不可能であった。重複癌症例は、扁、腺ともに11例ずつだった。他の疾病環境についても特に両者に著しい差はなかった。
結論：扁平上皮癌症例と腺癌例について癌以外の生命に関する危険因子を調べたところ、今回の検討範囲では、罹患年齢が扁では腺よりも有意に高かった。別の見方をすると、扁は圧倒的に男性に多い癌であることから、扁には、女性に較べ平均寿命が短いという男性としての特質も内在しているものと思われた。

## P-3　被爆者肺癌の臨床的検討

広島市民病院外科[1]、内科[2]
○妹尾紀具[1]、松本　伸[1]、石井泰則[1]、松浦求樹[1]、宮沢輝臣[2]

目的：1976年1月始めより1989年12月末日までに、当院外科で入院治療を行った肺癌症例588例を被爆例及び非被爆例に分け、肺癌患者に対する臨床像及び遠隔成績に対する被爆の影響について検討した。
対象及び方法：対象は原発性肺癌被爆例116例、非被爆例462例であり、手術術式においては被爆例では肺摘除6例、肺葉切除91例、肺区域切除3例に対し非被爆者においては各々52例、268例、4例と肺部分切除14例であった。肺癌の手術例における臨床病期及び遠隔成績についてはKaplan-Meyer法による生存期間を求め、非被爆者との対比を行った。
結果：1.性別では、被爆例においては非被爆例に比較し女性が多い。2.年齢分布においては、被爆例では70才台、80才台の高齢者が多い。3.訪医理由としての主訴の比較では、両者の間に差はない。4.組織型では、被爆例においては腺癌がやや多い。5.臨床病期は、両者の間に差はない。6.手術式では、被爆者例で肺葉切除例が多い。7.被爆者例の予後は、扁平上皮癌・小細胞癌・大細胞癌において不良であった。8.Ⅰ＋Ⅱ期の遠隔成績の比較では被爆者の遠隔成績は不良であるが、両者の間に、差はない。9.Ⅲ期の遠隔成績では、5生率、6生率、7生率においては、被爆者の予後は不良であった（$p<0.05$）。10.遠隔転移を伴うⅣ期症例では、両者の間に差はない。

## P-4　剖検、手術および経気管支生検肺癌症例の組織型分布と年齢について ―静岡県における自験例（1976－1990年6月）の検討

浜松医科大学第一病理　○森田豊彦

目的：肺癌剖検例を中心に検討して来て、肺癌の組織型分布は材料の差異による影響が大きいと気付いた。症例数の比較的多い剖検、手術（葉切以上）、経気管支生検（以下：生検）の自験例につき年齢を含め比較検討し報告。
材料と方法：浜松医大病院とその関連病院の病理材料につき、姓名、年齢、性、検査番号、検査年月日と病理組織型を検討した。特に生検材料は姓名、ＩＤ番号などにより同一人の重複を避け原則的に初回陽性材料を用いた。
結果：1）剖検肺癌　男性（173例）：腺癌（以下：腺）42、扁平上皮癌（以下：扁）24、小細胞癌（以下：小）19、大細胞癌（以下：大）8％、女性（48例）：腺63、扁10、小15、大10％で男女とも腺癌が最多組織型だった。
2）手術例肺癌　男性（200例）腺38、扁46、小4、大5％、女性（67例）：腺86、扁5％で、男性では扁平上皮癌が最多、女性では腺癌が圧倒的に多かった。
3）経気管支生検肺癌　男性（299例）：腺28、扁47、小15、大6％、女性（83例）：腺61、扁14、小13、大5％で、男性では扁平上皮癌が最多で、腺癌の割合が3材料中で最少、女性では剖検例の組織型分布と似ていた。
4）年齢分布と平均年齢　ピーク年齢は剖検例は男女とも70才代、手術例は男女60才代、生検例は男性60、女性70才代。平均年齢は男女とも手術、生検、剖検例の順に高くなり、順に男性：65、66、68才、女性：60、63、69才で、男女とも剖検例は手術例に比し有意に高齢だった。

NII-Electronic Library Service